

## 「クマが出たぞー」女湯に乱入し、無防備な裸を視姦する男

「よし、あの２人組で行くぞ」

「いいね、最高じゃん。女子大生かな」

東北地方のとある露天風呂の近くの茂みで、２人の男が話していた。

ちょうど、２人の若い女性が、更衣室の中へと入っていった。

露天風呂は山に面して作られている。

自然豊かな露天風呂だ。

この露天風呂は町営の露天風呂で、近隣住民は誰でも入れるし、近くの旅館に泊まっている人が来ることもあった。

この２人の若い女性も、近くの旅館に泊まっていた客で、自然豊かな露天風呂にも入りたいと思い、ここまで来ていたのだった。

２人の若い女性が露天風呂の方へ行ったことを確認した後、男２人は女湯の方へと入っていった。

そして、何の躊躇もなく、扉を開け放った。

「おい、クマが出たぞー。逃げなさいー」

「きゃー」

突然、男が２人、女湯に入ってきたので、若い女性２人は体をタオルで隠した。

「なんなんですかー」

「クマが出たんだ。すぐに上がって着替えて。安全な場所まで誘導するから。早くっ」

男がそう言い放った。

女性2人は何とか体を隠そうとしているけど、体のラインなんかはモロに出てしまっている。「わかりました。わかりましたから。一旦、出ていってもらえますか」

女性が顔を赤らませながら言った。

「いや、ダメなんだって、ほんと、早くしないと、みんなクマにやられちゃうよ。ほら、すぐに上がって」

男性がそう言うと、観念したように2人の女性が風呂から上がってきた。

薄いタオルと手で、体の胸や股間をなんとか隠そうとしている。

「ほらっ、ほらっ。早く、早くっ」

男性がそれぞれの女性の手を強く引っ張った。「いや、やめてっ」

「いいから、早くっ」

強引に女性用脱衣所のところまで引っ張っていく。

「ほら、早く服着て」

「わかりました。すぐに着るんで、外に出といってもらえますか」

女性がそう言った。

「違う、違う、もう早くしないと。ほら、ほら、これ着て。早く」

男たちは女性の下着を勝手に手に取り、手渡してきた。

女性2人は手渡された下着を受け取るしかなかった。

「これ、私のじゃない」